

児童生徒が主体的な学び手となる授業の工夫

図画工作・美術科研究会議

研究員 小川 俊輔（川崎市立東大島小学校） 黒田 智（川崎市立久本小学校）
相原 典子（川崎市立王禅寺中央中学校） 守屋 里美（川崎市立富士見中学校）
指導主事 岩崎 知美

I 主題設定の理由

図画工作、美術科においては、感性を働かせながらつくりだすことに喜びを感じ、心豊かに自分自身を表現できることが授業づくりにおいて重要な視点である。このような学習を実現していくためには、自らが学び、自らが活動に取り組むといった主体的に学習する態度の育成が求められる。児童生徒が主体的に取り組むことは、基礎的・基本的な知識や技能の習得や思考力・判断力・表現力等の育成の根本とも考えられる。

本研究では、図画工作、美術科の授業の中での、児童生徒の主体的な学習の姿について、自分なりの感じ方を大切に、自ら表わしたいことを見付けるなど自己決定がなされる場面であると考えた。図画工作、美術科の授業の中には、このような自己決定の場面が多く存在するはずであるが、必ずしも意識的に位置付けられているとはいえない状況である。本研究では、このような自己決定をしていくためには、活動場面や発問内容の工夫やタイミングが重要なのではないかと考え、それらについてどのような方策がより有効であるかについて考察していくこととし、研究主題を児童生徒が主体的な学び手となる授業の工夫と設定した。

II 研究の内容

1 研究の方法

児童生徒は図画工作、美術の時間に「この作品はここが美しい」と自分の感じ方を見付けたり、「この材料でどのような作品をつくらうか」と自分で表現の方法を決めたりするなどの自己決定を行うことで自分の学習活動に自信をもつことができ、さらに児童生徒の意欲が次の学習活動につながっていくと考えられる。そこで自己決定を促すことで主体的な学びが生まれるのではないかと考え、教師の手立てから発想を豊かにし、自分の感覚を働かせて感じとったり考えたりしたことを表現に生かしていく様子を研究した。

今回の研究を進めるにあたり、児童生徒が授業の中で自己決定する場면을導入部分で「感じ」、発想の場面で「考えて」、展開する部分で「表現する」こととして捉えてみた。それぞれの場面で、素材、モチーフ、使用する材料や表現方法などを児童生徒自身が選択できるように段階を追って設定することで、主題をより明確に構築し主体的な学習活動を生み出すことができるのではないと思われる。授業の中でそのような手立てを講じることで、それぞれの場面において児童生徒の学ぼうとする意欲が生まれ、感性を働かせながら試行錯誤し、自分自身を表現することに楽しさを発見して創造活動の喜びや自己肯定感を感じられるのではないだろうか。今回の研究では、実際の授業から見られた児童生徒の変容を捉え、主体的に学ぶ姿を検証したい。そこで小学校での実践では児童の活動の様子に視点を置くことで授業観察を行い、中学校での実践では生徒の活動の様子に加え、取り組んだワークシートや作品から主体的な学びの質的な変化を見取った。

2 研究の実践

(1) 研究対象 小学校3年生

題材名 「ザクザク、きって! サクサク、くんで!!」(2時間計画)

◇題材のねらい

段ボールと用具の特徴を感じ、段ボールを切って組み合わせる活動を通していろいろな形をつくりだしている。また、友達と交流しながら、組み合わせた段ボールの形から発想したり、組み直してつくりかえたり、さらに形を変えたりするなどしてつくる。

◇学習の流れ

感じ

導入

段ボールカッターの正しい扱い方を知り、段ボールを切る感覚を味わう。

考えて

発想

段ボールに切り込みを入れ、段ボールと段ボールを組んでいくと新しい形に変わっていくおもしろさに気付く。

表現する

展開

友達とのかかわりから、段ボールと段ボールを組み合わせる様々な方法に気付きながら工夫してつくる。

手立て①

・切ったり組み合わせたりして、手軽に新しい形をつくりだせるよう、丈夫さや加工のしやすさを考慮して段ボールを主材料にした。

自己決定の姿

- ・自分の思いに合うような形の段ボールを選んだり、用具を使って材料の形を変えたりしながら、活動に生かそうとする姿が見られた。
- ・用具を使って組む方法に気付くと「やってみよう」、「こうしたらどうなるだろう」という気持ちが生まれ、活動に表れていく様子が見られた。

手立て②

・切り込みを入れることで段ボールが組めることを紹介し、試す時間を十分に確保する。状況を見て、様々な形に組むことができた子どもを励ましたり、工夫した組み方をしている子どもを紹介したりして活動のひろがりを促した。

自己決定の姿

・自分の活動に自信をもつことができると、活動に変化が見られた。段ボールを組む活動に抵抗がなくなるにつれ、組み方を色々と発想することができるようになったため、新しい形をつくったり、つくり直したりして自分のイメージを具現化する目的を達成するために試行錯誤していた。

手立て③

・グループを設定せずに活動したい場所で活動を始めてよいことにし、友達の工夫に気付きながら、活動が展開されるようにする。

自己決定の姿

・友達の活動のおもしろさに気付いて自分の活動を変化させたり、自分の活動のよさに改めて気付いたりして、つくり、つくり変え、つくっていくことの繰り返しが行われていた。

◇考察

イメージを形にするための自己決定を場面設定するには、扱いやすい材料や用具、友達とのかかわり等の充実が必要と考えたが、検証授業では活動に主体的に取り組んでいる子どもとそうでない子どもの姿があったことから、手立てを詳しく見ていくことにした。その中で、試行錯誤する過程で自己決定を繰り返す場面があるように感じた。

活動では、手立てとして投じたことが子どもにとっては発想のきっかけにならない場合や個々に声をかけて支援することで活動につながる場合が見られた。そのような状況から手立て①にイメージを「形にしてみたい」と思えるような意欲を導き、手立て②にイメージしたものを形にするために、自ら方法を考えたり、友達の方法を共有したりして、自力で考える姿に導いていく方法がふさわしいと感じた。

子どもが主体的な学び手となる学習を計画するには、子どもの実態や既習活動の経験を考慮して柔軟に手立てを変えたり、支援の割合を調節したりすることが大切だと考えた。時には、会話を中心としたコミュニケーションから活動を展開していく自力思考も手立てとして大切である。

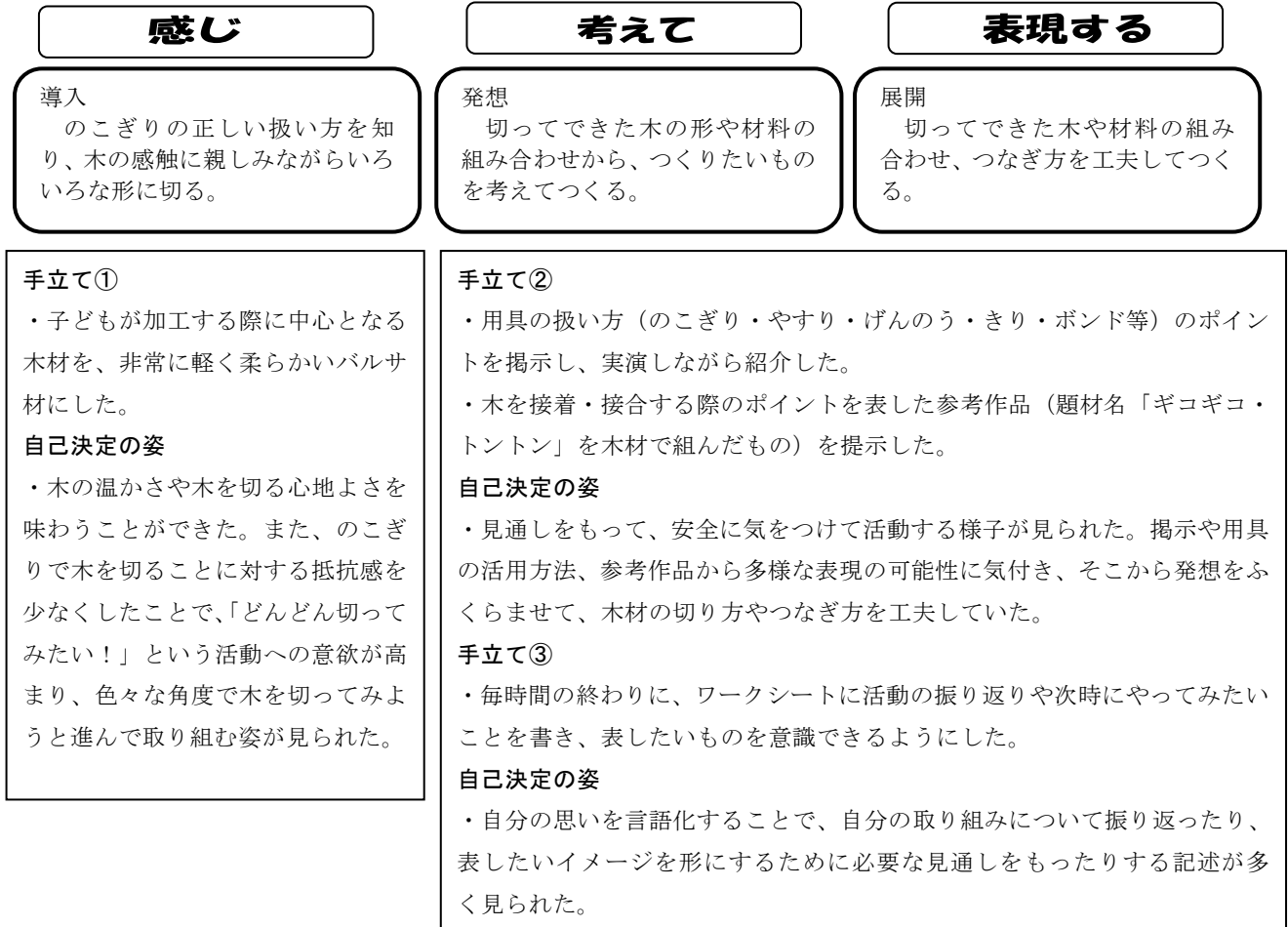
(2) 研究対象 小学校4年生

題材名 「ギコギコ・トントン」(6時間計画)

◇題材のねらい

のこぎりで切った角材や木片、くぎ、アイスクリームの棒などの材料の形や組み合わせから発想をふくらませ、つなぎ方を工夫してつくる。活動を通して、表したいことに合わせて材料や用具を使い、いろいろな方法を試みるなどして表し方を工夫する力を育てたい。

◇学習の流れ



◇考察

扱いやすい材料や用具、多様な技法、参考作品の掲示など、友達とのかかわり等の充実がきっかけとなり、自己決定を導くことがよくわかる結果となった。また、仕掛けた手立てが、子どもにとってのもう少しで乗り越えられそうな壁（適度な抵抗感）となって機能した場合にも、子どもの自己決定を促し、「こんな風につくってみたいな」という活動への意欲や発想・構想の能力、創造的な技能の発揮と高まりにつながるということがわかった。

(3) 研究対象 中学校2年生

題材名 「願い・想い・ピクトマーク(ピクトグラムを用いたマークの制作)」(7時間計画)

◇題材のねらい

ピクトグラムやマークの表現に関心を持ち、自分の伝えたいことが相手に伝わるように色や形などの構想を練り、表現方法を工夫する。アイディアを生みだすときに、数多くのアイディアを考えさせることで、生徒の発想構想の力を伸ばしたい。

◇学習の流れ

感じ

導入

身の回りのマークを鑑賞して、ピクトグラムやマークの性質を知る。単純化したマークを実際に描くことで表現活動に関心をもち、

考えて

発想

自分の伝えたいことや表したいことのアイディアを考え、形や配色などの構想を練る。

表現する

展開

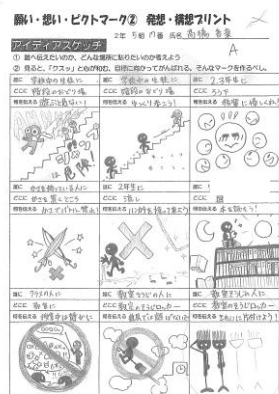
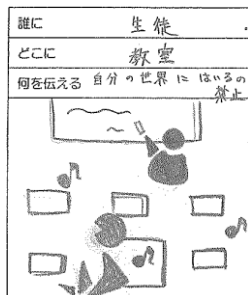
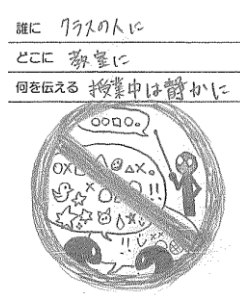
ポスターカラーの絵の具を用いて、自分の意図にあった表現方法を工夫して、マークを着色する。

手立て①

・多くのアイディアを生み出すために、複数のアイディアを描くことができるワークシートを用いた。

自己決定の姿

・「描きたいものが浮かばない」との生徒が多かったが、ワークシートを用い、「数多くのアイディアを描くこと」を活動の視点を置くことにより、アイディアを視覚化し始めることができた。アイディアをたくさん描き鉛筆を動かし続けることで、自分の考えがまとまり、その中から自分が表したいことを決定していった。

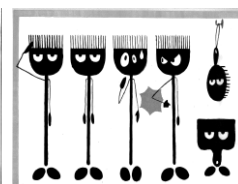


手立て②

・自分の表現意図にあう技法や用具を提示する。

自己決定の姿

・ポスターカラーに苦手意識をもっていた生徒もマスキングテープや溝引きの技法を選択することで、思いを表すことができ、活動に自信をもっていた。また、作品を大切に、丁寧に完成させようと取り組んでいた。完成した作品にも自信をもっている生徒が多くみられた。



◇考察

生徒の多くは、表現したいものや自分の考えが周りにどう見られているのか、という不安をもっており、生徒は「自分で」表現方法を選択するのではなく、「第三者」に表現したいものや表現方法の選択を委ねているように感じる。そのため今回の検証授業では発想の過程で、考え方やアイディアを練り、表現方法や構想を自己決定する時間を十分にとることで主体的な学びを生み出させたいと考えた。なぜなら自分の考え方や発想に自信をもつことで、そのあとの表現活動がさらに充実したものになるからである。また、生徒に主体的な学びが生まれるためには、学習のねらいを明確にすることと、生徒が思う表現を実現できる手立てが必要だと感じた。

Ⅲ 研究のまとめ



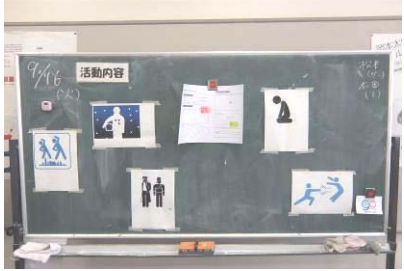
1 研究の成果

検証授業では、授業の中で児童生徒がより主体的な学び手となるために、自己決定をする場を意識的に設けた。そのような場では活動場面の設定と発問の工夫によって、児童生徒の発想が膨らみ、表現方法が変化している姿が見られた。以下に小・中学校3つの検証授業を通して見取ることができた児童生徒の自己決定の姿を示す。

○導入部分の実践

小学校3年生	小学校4年生	中学校2年生
<p>手立て① 段ボールの素材の提示</p>  <p>〔工夫〕 題材名を興味をもてる方法で掲示 〔発問〕 「どんどん組んでいったらどうなるかな？」</p> <p>自己決定の姿 材料や用具を選び、活動に生かす</p>  <p>〔児童の様子〕 どうやって切ろうかな どんな感じに組もうかな</p>	<p>手立て① パルサ材の素材の提示</p>  <p>〔工夫〕 題材名を授業で使う技法を使って掲示 〔発問〕 「木と木をつないで、何ができるかな？」</p> <p>自己決定の姿 さまざまな形に切り出す</p>  <p>〔児童の様子〕 どうやってつなげようかな</p>	<p>手立て① マークの鑑賞</p>  <p>〔工夫〕 身の回りにある実物を掲示 〔発問〕 「たくさんのアイデアを描き出してみよう」</p> <p>自己決定の姿 アイデアを出しながら考えを深めていく</p>  <p>〔生徒の様子〕 このアイデアが一番いいかな</p>

○発想・展開部分の実践

小学校3年生	小学校4年生	中学校2年生
<p>手立て② 組み方を紹介し、工夫を促す 手立て③ 好きな場所で活動する</p>  <p>〔工夫〕 教室全体に材料や道具を配置する 〔発問〕 「こんな組み方どう？」</p> <p>自己決定の姿 どんどん組み方が変化していく 〔児童の様子〕 おもしろそうだな 自分もやってみよう</p>	<p>手立て② 用具の使い方を提示 手立て③ ワークシートの活用</p>  <p>〔工夫〕 書きやすく、見通しの立てやすいプリントの工夫 〔発問〕 「どんなことができた？」 「次回はどうする？」</p> <p>自己決定の姿 新しい形や工夫を発見する 〔児童の様子〕 次はこうやってみよう</p>	<p>手立て② 用具の使い方を提示</p>  <p>〔工夫〕 作品例の提示 〔発問〕 「この表現にはこんな道具を使うとどうかな」</p> <p>自己決定の姿 自分の表したいことを表せる表現方法を見付ける 〔生徒の様子〕 思ったように着彩できた もっとこうしてみよう</p>

児童生徒が主体的な学び手となる授業の工夫には、授業のそれぞれの場面で教師が児童生徒の反応を予想し、児童生徒の思考を膨らませ、その中から自分で決定できるような手立てを準備しておくこ

とが必要であるということが見えてきた。また教師の準備した手立てにより自己決定が行われた場面では、それぞれの過程において主体的に学ぶ姿を見ることができた。

授業の各過程から自己決定の姿を考察すると、導入「感じ」の部分では、「どのようなものを制作しようか」と主題を見付けられたときである。実際の活動につながるような材料提示や発問の工夫を行うことで、自分なりの表現を見付ける自己決定の姿がみられ、意欲的に題材に取り組む様子が生まれた。そして発想「考えて」の部分では、主題を表現するために材料や技法を見付けたり研究したりして、新たな表現方法が実現できたときであり、展開「表現する」の部分では、自分の作品のよさを発見して自信をもち、友達の作品のよさを感じ取ることで互いの作品のよさを共有できたときである。

2 今後の課題

検証授業を通して、自己決定を促す手立てを意識的に講じたが、今回の小学校の研究では児童にとって有効であろうと準備した手立てが逆効果になることもあった。例えば、豊富な材料や手立てがいくらあっても、提示するタイミングを誤るとその効果が薄くなってしまったり、ねらいから逸れた活動を導いてしまったりすることがあった。児童の思考の流れを考えた、有効なタイミングを見極める必要があることが分かった。また、中学校の研究では、生徒にとって有効な手立てが個人によって様々であることが分かり、一人一人が十分に思考を働かせることができる環境づくりや、その中から自分のタイミングで自己決定できる機会をつくり出す必要があることが分かった。

それぞれの活動を通して、主体的な学びから心豊かに自分自身を表現できる喜びを児童生徒が実感できるような授業研究を今後もさらに深めていきたい。

最後に、研究を進めるに当たり、ご指導、ご助言をいただきました先生方、研究をご支援いただきました所属校の校長先生をはじめとする教職員の皆様に心からお礼を申し上げます。

【指導助言者】

川崎市立小学校図画工作科研究会長（川崎市立小田小学校校長）

宮川 友二郎

川崎市立中学校教育研究会美術科部会長（川崎市立玉川中学校校長）

川合 克彦